

氏 名	眞田 岳彦
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第31号
学位授与年月日	令和5年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者
題 目	学位論文題目 生命 衣服 芸術 —衣服造形による芸術表現—
	研究作品題目 あいち NAUプロジェクト「白維（はくい）」
論文審査委員	主 査 教授 神田 每実 副 査 教授 阿野 義久 副 査 准教授 竹内 孝和 外 部 茨城大学 審査委員 名誉教授 小泉 晋弥

1 学位論文の要旨

背景

衣服とは、繊維、糸、編織、染色、裁縫という基本要素と、時代背景や科学技術、産業、経済、思考、嗜好などさまざまな要素を含み造形される物品である。

衣服を媒体にした造形とは、気候風土、自然、環境、社会等と、人の営みに現れる、人間の自己表現を越えたものであり、見る・着る・包まれる・触るなど身体・皮膚感覚を通して他者と対話し得るものとしてある。筆者は、幼少から美術、10代から20代に衣服デザイン、30代にファイン・アートを学んだ。20代から「生きる」という意味を求め十数か国を巡り、30歳の時、極北グリーンランドに行き着いた。北極点から千数百 km の小集落で「或る狩人の軀と、アザラシの一枚の毛皮」との出来事に遭遇し「自身の生命への疑念」をいただいた。この体験が原因になり、翌年ロンドンで開催した「生命と衣服」をテーマにした初個展「Earthwards」以降「生命・生きる」という概念・意味を考察し、衣服にえられた意味・記号的諸要素を媒体にして、実用・非実用の別なく表現する活動を「衣服造形」と名付け進めてきた。

目的

本論考では、「アートとデザインを包含する衣服」による表現活動である「衣服造形」によって筆者が試みてきた「生命・生きる」意味や概念についての探求の取り組みについて、考察の対象を「人間と生命の問題」から「社会の中の衣服」についてまで広げ、更に近年、生物学、物理学、医学等の諸科学が、単独、或いは複合することで明らかにしてきた知見等の参照も加えながら、その成り立ちの再解釈を踏まえた体系的把握を試みる。そして、衣服造形の特徴である「着る・包む・触れる」など皮膚感覚を通して行われる芸術表現が果たし得る、役割、可能性、それらを含んだ意義について述べる。

意義

これまで洋の東西を問わず多くの研究者やアーティストにより、衣服についての考察・研究が行われてきた。フランスでは、20世紀になりロラン・バルトを筆頭に、哲学の視点から衣服を記号学として論じられた。日本でも1980年代後半～2000年頃にかけて、哲学、社会学などから衣服・ファッションの有してきた意味や記号性を論じる研究者が多く現れた。それら多くの先行研究者たちが行ってきた研究においては、衣服分野の研究者からはファッション性の問題が論じられ、芸術分野では表現論が論じられるが、筆者が進めてきた「人間と生命の問題」から「社会の中の衣服」にまでわたった考察を行い、それらをもとに衣服による造形表現を行う先行研究は見受けられない。その事をもって、本論の意義として示す。

方法・構成

本論文は、序論、1章～4章、結論で構成する。

「序論」では衣服造形の概要、本論の構成、目的について述べる

「第1章」では、「基礎的活動」として「人間と衣服」をテーマに「生命・生きる」概念・意味について、生命と「記憶」、生命と「光」、生命と「同一性」、生命と「同相」を表現した作品の再解釈を行う。そして、活動背景となった思考である「生命という概念」「生物と表層・膜」「生命と衣服」などの観点から、その理念を明らかにする。

「第2章」では、「複合的活動」として「地域と衣服」をテーマに、地域プロジェクトで考察してきた「生命・生きる」概念・意味について、生命と「文様・装飾」、生命と「形・痕跡」、生命と「技術」、生命と「道具」についての再解釈を行う。そして、活動背景となった「象徴的衣服の誕生」「人工的環境と記号的衣服」「衣服と装飾」などについて述べる。

「第3章」では、「応用的活動」として「社会と衣服」をテーマに主に企業、芸術活動組織、教育機関等との人材育成や社会貢献活動を通して考察を重ねた「生きる豊かさ」について「衣服と心の傷の緩和」「衣服と心と防災」「衣服と心の育成」「衣服と心の相互疎通」をテーマにした取り組みへの再解釈を行う。そして、活動背景になった「非言語記号としての衣服」「人間と衣服の歴史」「生活文化・芸術と衣服」などについて述べる。

「第4章」では、本学在籍中に制作した習作と「研究作品」について述べる。主に、同時代に生きる多くの人と「生命・生きる」概念・意味を共に考え、制作活動を行った本研究作品「あいちNAUプロジェクト《白維（はくい）（国際芸術祭「あいち2022」参加作品）》では、地域の約250名と共に「生命・生きる」意味・概念を考え、繊維を綯った衣服造形活動を通して「心豊かに生きる社会創出」の意義について考察し述べる。

結論

本論考では、「衣服造形」という表現活動を体系的に捉えると共に「人間と生命の問題」

から「社会の中の衣服」にまで対象を広げた考察を行った。それに基づいた衣服造形活動として、博士研究作品・国際芸術祭「あいち 2022」における「あいち NAU プロジェクト《白維（はくい）》」が誕生した。

本活動の参加者は、芸術、歴史、民俗、社会等の研究者の講演から「生命・生きる」概念・意味を考え、同時に、自身の手を擦り合わせ、羊毛繊維のザラザラした手触りと暖かさを感じ、匂いを感じ、生命の痕跡である羊毛を緬い、身体を動かし、他者と共同・協力しながら制作を体験した。そこには、イキイキとした笑顔を浮かべる姿があった。

本研究において「人間と生命の問題」から「社会の中の衣服」にまで対象を広げ、更に哲学的・社会的・民俗学的視座も含めて考察された「アートとデザインを包含する芸術表現活動」である「衣服造形」が、同時代に生きる人々と共に「心豊かに生きる社会創出」の可能性と意義を包含するということを確認した。

今後も、地球規模の環境問題はじめ、さまざまな人工的環境変化が起こりつつある時代に生きる一人の人間として、衣服造形による芸術表現・活動を更に広げ、国や民族の別なく、さまざまな社会や多様な人々と手を携え「心豊に生きられる社会の創出」への寄与を目指したいと筆者は考えている。

2 学位論文審査の要旨

【論文】

眞田岳彦による、学位申請論文「生命 衣服 芸術—衣服造形による芸術表現—」は、「アートとデザインを包含する衣服」による「衣服造形」によって申請者が試みてきた、「生命・生きる」意味や概念の探求、取り組みについて、その成り立ちの再解釈を踏まえて体系的に整理している。そのうえで、「着る・包む・触れる」など皮膚感覚を通して行われる芸術表現である「衣服造形」が果たし得る役割、示し得る可能性、意義について考察し、その有意性について述べようとするものである。論文は、序論、本論（四章）、結論によって構成されている。

序論では、この研究の背景、主旨、課題、目的を示し、それを受けた本論では、第1章基礎的活動「人間と衣服」、第2章複合的活動「地域と衣服」、第3章応用的活動「社会・歴史と衣服」、第4章愛知県立芸術大学在学中の衣服造形研究 という、各章ごとの表題に示された課題について、自身がこの取り組みを行うに至った経緯、自身の作品制作、プロジェクトなどを事例に、先行研究等に示された知見を参照し、批判・検討しながら考察している。「国際芸術祭あいち 2022」における博士研究作品「あいち NAU プロジェクト《白維（はくい）》」は、結論で述べられている「衣服造形」の可能性と意義を裏付け、各章で検討された「人間」「地域」「社会・歴史」と「衣服造形」の関係を実践的に確認するものとなっている。

序論において、申請者は「衣服」及び「衣服を用いた造形」について、①「素材、技術、技法といった生成に関わる基本要素と、時代背景、科学技術、産業・経済、心理、思考、

嗜好等のさまざまな要素を含み造形される人間の生活に不可欠な物品、要素である」②「衣服を媒体として用いた造形には、気候風土、自然、環境、社会等の影響が自ずと現れる」③「見る、着る、包まれ、包む、抱く、触る等の身体・皮膚感覚を通じた他者と対話を実現しうる」と分析している。その上で、衣服造形とは「衣服が与えられた意味・記号的諸要素を使用し、実用・非実用の別なく造形し伝える表現活動」であるとの仮説を示している。

申請者は、「衣服造形」を次の3段階に分類している。①基礎的活動：「生命・生きる」ということに関する、意味・概念を、制作を通して再解釈し、新たな表現形式を作り上げ展覧会などで発表する活動。②複合的活動：①に加え、地域産出の繊維を中心に据えたプロジェクトを通して、主に活動の対象となった地域住民と「生命・生きる」意味や概念について再解釈し、衣服造形を通して新たな形で再提案する活動。③応用的活動：①②に加え、主に企業、芸術活動組織、教育機関などと連携をとり、広範囲関係者と「生きる豊かさ」について再解釈し、人材育成や社会貢献の再提案を目指す活動。

それらの活動は、「生命・生きる意味」とは何かという問いによって貫かれている。申請者は、「衣服造形」と命名した表現活動を、上記の①②③に再配置することによって、「衣服造形」の段階的構造とその働きを確認し、もって「己」「地域」「社会」を「生きる豊かさ」を生み出す、「衣服」を表現媒体とした芸術表現の可能性と意義を明らかにすることを目指している。

「本論文の意義」において、申請者は、これまで多くの研究者やアーティストによって行われてきた先行研究との違いを示している。特に、ポーランド人アーティスト、マグダレーナ・アバカノヴィッチの造形作品が、繊維を素材とした生命への考察ととらえながらも、申請者が進めてきた、「人間と生命の問題」から「社会の中の衣服」までの視野を持つ、衣服による造形表現とは異なることを指摘し、本研究の独自性を主張している。

第1章 基礎的活動 「人間と衣服」では、先ず、「生命」という概念の再考察が、多くの研究者にとって、21世紀における社会的な課題であると主張している。そして、申請者にとってその課題は、20代に体験した、グリーンランドにおける「或る狩人の軀と、一枚のアザラシの皮」との遭遇に発した、「自身の生への疑念」に基づくとすることを記し、この体験と本研究の重要性を示している。

申請者は、生命を支える細胞の構造、特にその内部・外部を隔てる膜と人間の身体と皮膚を準えることで生命と衣服の関係を概念化した。申請者は、基礎的活動を「生命・生きる意味」ということに関する、意義・概念を、制作を通して再解釈し、新たな表現形式を作り上げ展覧会などで発表する活動と規定しており、「記憶」「光」「同一性」「同相性」「衝撃」をテーマとする5作品について、概念化された身体と衣服の関係に現れる、「膜」「際」等の概念を通して論じている。その推論の根拠に、衣服の誕生に至るイメージ図や、科学的、概念的報告等による再検討をおこなうことで、作品制作と論考の体系化を試みている。それによって、自然科学と人文科学を包括した、人間の生活の営みである衣服造形を、芸術として実現する可能性を示している。

第2章 複合的活動 「地域と衣服」では、「生きる意味は、自身の足もとにある」をテーマに、伝統的繊維文化が継がれてきた地域で行なった「地域プロジェクト」を、「衣服造形」の主な活動と規定している。2011年から3年にわたった国立民族学博物館外来研究員の経験もあり、地球と大地、気候風土と生物、地域と生活文化、社会と習俗のなどとの関係を考察しながら「生命」についての探求領域を広げている。

日本各地で自生、栽培されてきた植物繊維や、衣服を構成してきた要素（繊維、糸、布、文様、色彩、形態等）に衣服に含まれる「生命・生きる意味」を見い出そうとした作品が制作され、《神話の衣服》《円際》は記号や象徴に、《雪の形》は「技術」に、《白際（はくさい）》は「道具」に、それぞれ着目して生まれた。

その制作と考察から、「衣服は、人間を取り巻く環境と人間という生命活動の間に存在する、或いは生み出される『生命を表象する際』として捉えることが可能になる。」という独創的なヴィジョンを提示している。

第3章 応用的活動 「社会・歴史と衣服」では、芸術大学等の研究機関における次世代への研究、教育と並行して、同時代に生きる人、次世代の人々に「今を豊かに生きるきっかけを手渡す」ことが目標とされている。2000年頃から、行なってきた具体的な美術表現活動を「応用的活動」と規定している。

この活動は、企業へのアート・ディレクション、地域行政との学習会、ワークショップ、私塾、次世代の造形活動支援、大災害を体験し傷ついた心の緩和・回復を支援する活動、視覚障害者と繊維素材を介した相互学習会など、多岐にわたる。《Front/Back（前／後）》《プレファブコート》《プレファブコート・ライス KUMAMOTO》などは、社会への貢献というよりも提案的な要素に満ちている。「真田塾」、視覚障害者との「造形ワークショップ」などは、教育活動であると同時に申請者が新たな発見に導かれる優れた作品とも見なされる。「ある時代・地域・社会の『生命という概念』を言葉で記すと共に、衣服に与えられてきた象徴性、記号性などの表層的構成要素を使用し造形表現を行うことで文化、言語が異なる地域の人々へも『生きる意味』を問い、それをして共に考える機会の可能性を求める表現活動として進めてきた。」という申請者の言葉を裏付けるものということが出来る。

その結果、鶴見俊介『限界芸術論』の「芸術の体系」図表に、衣服と衣服造形を加えるという申請者の提案は、特筆すべき業績と見なすことができる。

第4章 愛知県立芸術大学在学中の衣服造形研究 では、本学在籍中に制作した試作4点と、「研究作品」について考察している。

同時代に生きる多くの人と「生命・生きる」概念・意味を共に考え、制作活動を行った研究作品「あいちNAUプロジェクト 《白維（はくい）》」（国際芸術祭あいち2022参加作品）」では、地域の約250名と共に、「生命・生きる」意味・概念を考え、繊維を綯った衣服造形を通じた活動の意義について考察し述べ、その活動を通して確認された衣服造形の有意性について述べている。

結論では、申請者が30年間という歳月をかけて取り組んできた「衣服造形」の取り組みの始まりにあったグリーンランドでの遭遇に関する手記や、文字、文明の儂さ、或いは

地球環境の変化、自身の表現の新たな方向へのシフトなどについての手記の一部を紹介しながら、申請者自身が、敢えてファイン・アーティストとしてではなく、ファイン・アートとして内省を深め得る理念を、生活につながるためのデザインを介し教育・社会支援などへ生かす手法として「衣服造形」を考え、或いは活動家として「衣服造形家」へ方向を定めたのかという理由を「概念的領域を包括し得る“造形”という領域を通して、本質・美・感動を一般の人々に繋ぎたい」と記している。それは、還元すれば、衣服造形とは、ファイン・アート/純粋芸術と、デザイン/大衆芸術を包括する根源的芸術としてあり、人々が時代ごとに求める豊かさに対し、それらを供与していくべき役割がある表現領域であると考えていることを示している。

申請者は本研究において、自身の「衣服造形」という表現活動を体系的に捉えると共に、「人間と生命の問題」から「社会の中の衣服」にまで対象を広げた考察を行い、その実践としての博士研究作品・衣服造形活動とした「国際芸術祭あいち 2022」における「あいち NAU プロジェクト 《白維（はくい）》」の取り組みと、誕生の過程における参加者の取り組みの様子を詳細に報告している。「アートとデザインを包含する芸術表現活動である衣服造形が、同時代に生きる人々と共に心豊かに生きる社会創出の可能性と意義を包含するということが確認された」と取り組みの成果を評価しているが、妥当なもの判断される。

申請者は本研究において、「衣服造形」の成り立ちについて、「人間と生命の問題」から「社会の中の衣服」にまで対象を広げ、更に哲学的・社会的・民俗学的視座も含めて考察し、本論中において、その体系化と位置づけを行い、現時点での体系化を行った。「あいち NAU プロジェクト 《白維（はくい）》」は、その体系化の有意性を、取り組みの結果において示すものであった。

「衣服造形」は、「衣服」という人間の生活、生存に不可欠な物品であり、様々な人間の営みを含み、映し出すものである。その素材、形、色彩、技術、技法には、触覚を含む身体性を伴った地域の特徴を示す個性が現れ、それ自体が人間の生活の最も基本的なフォーマットの上に現れる表現であると考えることが出来る。申請者の「衣服造形による芸術表現」の試み、取り組みは、それ故による芸術表現・活動を更に広げ、国や民族の別や、様々な社会を包み込み、「心豊に生きられる社会の創出」への寄与を果たす可能性を示す独創的、根源的な取り組みであり、「芸術」の本質とその有意性を新たに提示するものであると考えられる。

【作品】

あいち NAU プロジェクト《「白維（はくい）」》

衣服についての考察を、その根源である生命維持の観点から始め、地域・社会へと表現の場を展開して行く制作活動は、ダイナミックでありながら、緻密である。特に商業施設と連携する活動によって社会性を獲得し、影響を広めていることは高く評価できる。本作品《あいち NAU プロジェクト「白維（はくい）」》は、公開終了後に解体されて、プロジェクト参加者のもとに分配・返却され、それによって作品としての本来の完成迎える。

そのように計画された本作品は、近代的な芸術の枠を越えたものであり、ヨーゼフ・ボイスの社会彫刻という思想を更に進めたものと見ることも出来る。また、本作品の制作にあたって、県内7ヶ所でのワークショップを行っており、そこにおいて、学びのための講座を開催し、地域住民と共に学ぶ、という姿勢は、クリストのプロジェクトのような、落下傘的な行為とは見事な対象を見せており、作者と観者の対象性は、21世紀の芸術に求められるアクターのあり方を示す好例と表現することができる。

申請者の社会における取組を踏まえた研究は、学術的な観点からも、鶴見俊輔の『限界藝術』を拡張することができること、衣服が「限界藝術」と芸術を結ぶ最もふさわしい「もの」であることを導き出しており、高く評価することができる。歴史的な展開を、今生きる人間への応用として生かす工夫と知恵が、これまで申請者が取り組んできた《アンギンプロジェクト》《プレファブコート》などのプロジェクトに込められており、申請者の新しい考え方が、今後世界的に評価されて展開されていくことが期待される。研究作品《あいちNAUプロジェクト「白維（はくい）」》は、申請者の30年に及ぶ活動の積み重ねの上に、本学における研究活動を展開することで生まれた、申請者の「衣服造形」の姿とその可能性を典型する作品であると評価できる。

【口頭発表】

申請者は、論文、作品の主旨、内容等についての発表を、準備した資料（パワーポイント）に基づき、与えられた時間内において過不足なく行った。発表のために準備された資料は、申請者の研究内容を網羅するものであったが、申請者自身の研究を十分に概観できるものであり、申請者の研究上の課題であった「自身の研究を体系化」についての成果が十分に確認されるものであった。

また質疑応答においては、申請者は、審査員からの質疑に対して、作品の制作意図、構造などを、「NAUプロジェクト」に先立つ東海地方での調査、分析、その基づく同プロジェクトの企画内容、ワークショップと関連させて回答した。また申請者は、本研究の成果に基づきながら今後の研究課題、及び長期的な展望等について回答した。それらは、申請者自身の研究に対する明快な理解を裏付けるに足る十分なものであった。以上のように、眞田岳彦はこの論文及び作品において、博士の基準を満たすことを示した。

3 最終試験結果の要旨

2023年1月20日、愛知県立芸術大学附属芸術資料館において、予め提出された論文、展示された作品、及び15時40分から行われた30分間の口頭発表等に基づき、本報告書審査員氏名欄に記した4名の審査員により、学位申請者である眞田岳彦に対して20分間の口頭試問による最終試験を実施した。最終試験結果の要旨は以下のとおりである。

申請者は、論文、作品の主旨、内容等についての発表を、準備した資料（パワーポイント）に基づき、与えられた時間内において過不足なく行った。発表のために準備された資料は、申請者の研究内容を網羅するものであったが、申請者自身の研究を十分に概観できるものであり、申請者の研究上の課題であった「自身の研究を体系化」についての成果が十分に確認されるものであった。質疑応答においても、審査員からの質疑に対して、作品の制作意図、構造などを、「NAUプロジェクト」に先立つ東海地方での調査、分析、それ

に基づく同プロジェクトの企画内容、ワークショップと関連させて回答した。また申請者は、本研究の成果に基づきながら今後の研究課題、及び長期的な展望等について、豊かな社会の形成への寄与の意思も含め回答した。

審査員は、申請者のこれまでの社会における作品発表、ワークショップ、プロジェクト等の活動に基づいた研究の成果を確認しながら、現時点での課題も含めた研究の合理性、充実度、独創性・新規性、国際性等に対する有意性について検討し、眞田岳彦による博士後期課程における研究「生命 衣服 芸術－衣服造形による芸術表現－」が、これらの要件を十分に満たしていることを確認した。また、申請者はこれまでの社会における「衣服造形」と自身が命名した活動実績の体系化とその論述、本学在籍した期間において試みた実験、及びそれに基づく制作と論述により、「衣服造形」の姿を明確化し、「衣服造形」「衣服造形による芸術表現」が社会において果たし得る役割、可能性を示した。それは、鶴見俊輔が示した『限界芸術論』の末尾に示された、「芸術の体系」を示した表について、新たな一枠の付加を可能とするものであった。

以上についての確認をもって、審査委員全員は、眞田岳彦の研究、及び学位請求論文「生命 衣服 芸術 － 衣服造形による芸術表現 －」博士の学位を与えるに十分なものであると結論した。但し、論文中の語句の一部を、期日までに修正することを博士論文の最終的な受理の条件とすることとし、全ての審査を終了した。